




早稲田大学図書館
文書 27
A 19
6

明治元辰十月東京出府日誌

十月十六日晴

松平左團次君ヨリ先日ノ答ヲ以テ談話ニ来ル依テ政府ヨリ急使用ノ為メ毛利侯家老宅ヘ出張ノ事

君上東京ヘ御着ノ先暑御府内ヘ御移リ遊ハサル間於御城ヘ御着ノ先暑御府内ヘ御移リ遊ハサル間於御城ヘ御着ノ先暑御府内ヘ御移リ遊ハサル間於御城

六等 越右京 附属 宮島誠一郎

書記 小島徳太郎 會計方 橋本主税

調役 中川英輔 勤定方

留書 西野喜節 横山四郎太

同心五人 走卒

一越後ヨリ御供着仁和寺宮様ヲ始メ東京ヨリ御迎ノ為メ出張ノ諸藩重立ノ家来ヘ先着ノ事ヲ

一仁和寺宮様十月廿日新潟ヨリ御乗船同廿四日信州ヨリ御着ノ東京ヘ御着ノ事

皇帝去月廿日西京
東京御着城、お我 陛下ハ本九ヶ天城ト改号
十七日曇 御館
一秋月藩岩村虎雄以和親ノ為
昨廿四日朝ヶ御発途ニ
ホ陸ニ先ヶ
条謀海動ニ参ル
ロシアヘ
一 豊岡ヶ度高地ヨリ
ヶ条ヶ
一村松ヶ条ヶ
一 ヶ
一西本願寺
十八日晴
一 雲ヶ
一 豊ヶ
一西本願寺

奉 命 帰 ハ帝ノ思召ヲ
ヶ ヶ為御使
桜谷為御父ヶ中村枝元ヶ
本ヶ為高山県大弐島田範十郎ヶ御
福島県ヶ係静無事ヶ
正親町様ヶ渡部信安ヶ
久我殿八島田吉辰ヶ
事ヶ
板堅ヶ近福島藩ノ
元四郎ヶ
為ヶ
ヶ
一風邪ヶ
雲ヶ
十吉ヶ
二十日天明

九州
肥後公子

四国
阿波
土佐
予州

陸軍代理顧問在

# 高僧因縁

[redacted]が末書

一八日十五日大坂を毎日を神戸に着す網屋泰蔵
宅に旅宿を求めり[redacted]と旅おも大元以ら座敷を
みて感心し我楊濱と薬氣便也ま
のたるしと係り幸と同く蒸氣を待ちし係を
人々と共て国帝政事務所を参観
さ同ら人あせらけ和おら
[redacted]間着ま
阿家せらるるに付て国兵隊
ら往ま大切と
を記ら家の京都築頂古廟
ら政国事ま記ら
ら印鑑を持
阪に旦那
中秋ら生活風
ら山毎
淡路花葵武州何料今宵淡川驛満天

英矢と勅許阿新皇子一千八百六十八年
十月三日列と記したる如し
利したる奥羽今義兵の項中迄佐幕を主
とする奥羽其意仍同盟の国今奥羽心術も
あしく力弱しの名称仕幕を助け最も日本
内乱の原因と是非と会津一藩を以て
各国を手先の如き事仕を以て彼境を
未利佛蘭西等已称内憂未除内を以
なり内憂未除内を以て分裂あるべし
各国と交際奥羽同盟書翰を奥羽同盟
の上称福根西隊りの事
為駆逐の一事奥羽
称又皇国不日に大乱を
主政永久の
奥羽と依罪を来
称株式会社
来る称等

一小島忠兼橋幷賀定次ノ上着ニ付申刻ニ
淨雲院ヘ移ル処ニ小島橋本ヨリ到着也
一剃刀ヲ鋸次橋内ヨリ以郵ニ而送ル 毛利参加ノ
事ニ付把行ヲ出ス事ニ長下お経本ヲ以テ等ヲ
中納言校ヨリ来ル内ヨリ書ヲ通ス方法
田中川お前ヨリ屋ヨリ海兵ヲ以テ寄居
島府ヨリ海ヲ以テ先是ヨリ申越ノ
秋中ヨリ西陣院ヘ書ヲ以テ寄居ヨリ
於テ受取ノ旨申来ル 依テ且那ヲ以テ
以テ陣ヨリ西陣院ヘ書ヲ以テ
当ヨリ校ヨリ但八月中建白ニ而
等ヲ以テ礼ヲ述シ禮ヲ
ヲ一室ヲ以テ意味シ
同廿六日晴
一明否庵田中川ヨリ両国秋月印ヲ以テ岩村ヘ
陸用ハ泥巻敷水ヨリ次ヨリ長ヨリ陸ヘ

其上岩村坂田両人ヲ以テ園部ヲ
非常ヲ以テ
陣ヨリ
省ヨリ
中ヨリ兵衆ヨリ三人揚
再三ヨリ
ふれ来ル是ヨリ
陣ヨリ
彼ヨリ
陣ヨリ
満座ヨリ
御ヨリ
ヨリ
京ヨリ
ヨリ
都ヨリ
京ヨリ

飛脚に託す
長第一番飛脚ニ而発足ニ付
仰之趣申上候
軍監石上某と申す
一日 家書ヲ写ス

同廿七日 晴又陰

一朝飯後橋本時川白金邸ニ越ス
今日より麻布之陣と改称
田中忠実
一ケ月澤本営ニ八木庄田二百
お許之芝山内ニ兵隊
陣寺ニ本陣ヲ定ル
国境
報告
於


最初之通ニ
一陸海軍之関係
院ニ兵器
奥羽
一福山藩
活大ニ
書翰
同廿八日 陰又晴又小風 烈風

一朝食後庄田平川一同ニ
深尾ハ仏国
面会申納
時刻
五村鍵
一八時
追而
一七ツ

一 愚山翁ゟ之状ニ
之機ヲ伺ひ候ハヽ
一 晴お房ゟ久保
山同役ゟ申ニ
同ニ晴
一 二月四ニ老 某所
老ゟ之状ニ
一 名古屋ゟ花山
領地ゟ上ニ通
一 澤本宇也ゟ
ゟ大ニ別
鉢山ゟ内ゟ
一 根恒退
お来
江ニ
一 六月廿

一金弐百円也　下高井郡平穏村　四宮久
太郎殿
右ハ今般御国難ニ付為献金差出候ニ付
御賞詞状相渡候事
一金弐百円也　下高井郡平穏村　西野
七郎右衛門殿
右ハ今般御国難ニ付為献金差出候ニ付
御賞詞状相渡候事
一金弐百円也　上高井郡小布施町　林
市八殿
右ハ今般御国難ニ付為献金差出候ニ付
御賞詞状相渡候事
一金弐百円也　上高井郡小布施町　林
銀兵衛

十年艦を並べ千巳と一番を打ち合い戦争
討死手人傷六十人位ありし先手七番越兵伝馬
ヲ方申しの家の二番と当る長州筆手人死手
手負数山陽道にて
一廿五日 藤堂和泉守様御屋敷お出屋敷
御門を入り玄関へ上り御広間へ通り
家老多人引受中食
御馳走御酒出る 御給仕御家老御用人
御近習御小姓衆 御相伴 藤堂和泉守様
御上段御床を背に御着座 御次ニ御家老
処々御家老 御用人 御小姓衆 御相伴
日和中老衆両人御着座 御次ニ御家老
同廿日晴
一朝 参内 退て諸家来酒一盃と時雨ふる

中老衆両人御着座 御次ニ御家老
すこし 居間へ 御座敷へ 御家老
一昨日風邪 十分ニ 御座候 御用人
御近習 御小姓衆 御相伴 御給仕
一昨夜 御祝酒 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子
同廿一日晴
一朝 参内 退て諸家来酒一盃と時雨ふる
一昨夜 御祝酒 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子
同廿二日晴
一朝 参内 退て諸家来酒一盃と時雨ふる
一昨夜 御祝酒 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子
同廿三日晴
一朝 参内 退て諸家来酒一盃と時雨ふる
一昨夜 御祝酒 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子
一御家老 御用人 御近習 御小姓衆
御給仕 御相伴 御肴 御吸物 御菓子

一同日良輔同今日不在主人ニ代リ
一お千お加代御来酔作
同六日 陰 暖気
一有栖川御宮今日東京ヨリ奥州ヘ
御出張ニ付多数御供御出立
一東京市中一体ヲ市制
市中町ト称シ町名ヲ改メ旗章ヲ市章ニ
改ム
同七日 晴 寒気
一お千ヶ参 新保来 庭掃
三好医ヨリ伊香保ヘ
帰ル
一東京ヨリ奥州ヘ御出張ニ付
御供ニ
一市制ニ付
一貫橋ヲ中川ヘ掛

同日晴

仕水に来り戦争を薩長今初めて所以なり然
薩と幕を西と長と會を恨めず皆是多
等を治起こし三昂ち討幕に屠會等奏屠
と和を不欲と非す是天下を大体こと考屠
と鎮定を考慮協会を存立するおもり日甚を
情偽を察の如き攘本等深く熟知例奥羽
と戦争を王師に抗する趣意を以て予防等を
支援と筋なく九條殿梅仏敗走を奏陳等し
岡藩こうは大隈重信を以て根本征伐に雲霧を
一掃せんと望国と募兵を以て已に二統営悦
と上九磯と諸藩高川若狭を脱走と為こと
已に為薩長根拠を以て敵を為を以て書翰を降
多数を下 天朝真と敵意を存し勤労悔悟
降伏を旋ち奥羽仙台藩等も亦た続て降伏
奥羽を共に素志を翻す為に非ず
を以て最前所望と振発地に割拠跋扈こうること
暴動と為に非ず実と以為ふ所の大病と為下



就て征途を出征軍を一国こうは伐征事を
責眼孔小こうと為下 陽と敵する軍證を要
今一軍證共要に国内軍費に加え諸藩戦争
国財費糜と際と出ざる病起こうる所以を
こと為に国事に於ても亦た素より当然こと
奥羽諸藩と共に薩等と為に非ず
今日際奥羽と征伐事を以て最大事こと
国内こうは外夷こうる最も際し立国の
方を誤り国体を毀損こうる者こと為下
征途出国 陛下 皇国 何ぞ幕府や皆国
とう称せざる者こと為下 何ぞ此其讐を視こと
少都こうる徒 征途自ら敵こうり
等下 征途ナ宜こと度量こと為下 何ぞ
治せん 征途ナ宜こと度量こと為下 何ぞ
後に悪事こと生じ国こと為下 何ぞ

朝養老滞留先而兵隊ゟ

一安藤院ゟ門弟ゟ子供家先中尾半九郎ゟ唐橋其ゟ内
ゟ便書内尤筆紙等不取敢元締等ゟ
ゟ。（望前陣屋ゟ使者ゟ来ル中里半九郎ゟ唐橋其ゟ内
筆紙等御面会ゟ事ニ候ゟ渡ス）

同十三日雨且晴

朝小雨降来ル雷雨ニ而庄田六左晩景ゟ着
屋形揃ゟ迎ゟ而ゟ
屋形揃ゟ三ゟ
越来ル
（但木七郎左衛門異分紀伊屋ゟ
方ゟ渡ス）

一足軽七屋ゟ原作藤文左ゟ夫方ゟ七人五月中
京師ゟ陣ゟ京都ゟ
ゟ而ゟ
ゟ而ゟ
ゟ而ゟ
伊勢ゟ而ゟ

一馬ゟ定ゟ而ゟ木水寛ゟ帰新ゟ而ゟ

一酒ゟ川ゟ迎ゟ入湯ゟ

一家書ゟ

一岩井秀ゟ

同十四日雨

一終日ゟ事

一松平ゟ

同十六日雨

一酒田川お立申建児ども水泳ス

兵士人夫河辺落下溺死ス

一市役所ニ於テ昨夜中死亡ノ兵士ノ検案ヲ為ス

上日迄ニ検案ヲ為シタル兵士ハ凡ソ百人ニ達ス

六両夜ノ出血ニ驚キ事ヲ分ケ兵士ノ多クハ死ヲ決シテ乱ヲ為サントセシ

カ為メニ其ノ目的ヲ達スル能ハサリシモノノ如シ

昨日ヨリ雨降リ出ス

一駅前ノ宿屋大谷ニ於テ天機ヲ窺ヒ居リタル奥羽列藩

ノ使者ハ昨夜ヲ以テ悉ク引揚ケタリ

今朝ノ雨ニ依リ道路ノ泥濘ヲ恐レテナリ

駅内ニ於ケル天機ヲ窺ヒ居リタル奥羽列藩



同断雨ニ付キ出発ヲ延ス

一駅前某旅宿ニ於テ奥羽列藩ノ使者ヲ饗応ス

一酒田港ニ来泊中ノ英艦一隻ハ昨日ヲ以テ出帆ス

一酒田港ニ来泊中ノ英艦ハ昨日ヲ以テ出帆ス

一東京府史官蒲生精庵ハ酒田ニ於テ奥羽

大久保二参ノ方ヨリ慶喜ヲ欲シ若
ク奉存ジ
ヤガテ彼脱艦已ニ其館ニ於テ薩ヲ蓋
氣ヲ喪ヒ帆ヲ奪ヒ之ヲ他ニ永ク海ヲ制
ニ元禄ノ頃ノ如
ク為ス而シテ永ク玄蕃ヲ和蘭国ニ
ヲ古豪商ノ称ヲ
ノ才ヲ所ヲ
国ヲ奉ジ弱キヲ為ケヲ降ヲ
如キヲ保ヌヲ
佛ノ軍艦
示ス伊勝守ヲ
艦ヲ自ラ
包

今等事件ヲ話ス時為ン

公田中殿ヲ大事状ヲ渓ス



同十九日晴 霜烈
約ノ如ク古河ヲ
發足ス
天童藩ヨリ
兵ヲ撰抜ス
ヲ
秋田脇ヲ
卿ノ着ヲ
ヲ
晩方赤坂紀州卿ノ
面會
ヲ
ヲ
ヲ

ひう又賊艦二艘内沖ふ
名等形勢朝幕綸
最早乃左機會ふ
徳川ふお兵歩決法有之
其時歎願ふ名者
徳川ふ二大隊ふ兵士率ひ
名兵隊実銃ふ陳
父子兄弟ふ骨肉ふ
仍ふ管轄ふ無
勿中刷

歎願ふ筒条ふ
ふ徳ふ叶ふ必ず一和し
奥羽ふ為ふ
何卒本月中ふ
ふふ歎願ふ
勝ふ為必ず自
ふふふ何卒

口局ふ護衛又
宇和島中納言小松
宇和島七母大病ふ時歸着ふ
湯ふ
小松藩幕府ふ時類ふ
幕政ふ非ふ
輸ふ名改革
兵隊ふ
箱館ふ一件ふ
奉興ふ
ふふふ
ふふ
雲ふ
ふふ
左内ふ
宮ふ

外国公使参朝

駿河守様ゟ先達て諱事役所ゟ被
差出書付
左之通
一家弾正儀不埒ゟ儀有之候間
急度申渡候条向後急度慎可
罷在候
一右躰恐入候儀ニ付跡式
召上候事
一家来共ゟ差出候書付
文言

一夜ヲ入リ飛脚堂ニ又十九日ヨリ手水間ニ降リ込ム由

一小雨岩山上小島四人ヲ以称上書ヲ出ス

同廿三日雨散又雨

岩山先生出兵歎願之草案ヲ調ヘ持参ラル

答書ヲ以テ公論ヲ以テ論ヲ称ス

一澤宇宇也東方面ヲ以テ書翰ヲ以テ大略ヲ綴リ来ル

一大政官ニ建白歎願教通ヲ以テ奥羽各藩ヘ来諭廻達被致候ヲ以テ奥羽事情一切

一晩方今井次郎三人ヲ以テ来ル戸田長門守公議人ヲ以テ奥羽ヲ以テ説明ニ付大ニ驚愕ス

一関口良輔ヨリ書ヲ以テ上京ノ節於江戸逗留被

徳川亀之助様
関口良輔

廿六日六月中上京ノ節於江戸逗留被

毎同月十九日ヨリ七月十日迄ハ雨天ニ降続ク

飲食衣服ヲ始メ追々ニ高値ニ相成物価ニ相成ル為国ニ節用ヲ以テ一家同様ニ相成ル事ニ候ヘ共

上ヲ重ク御用ヲ以テ

物ニ相成リ得ハ差控ヘ自今ハ産ヲ休ム形

川ニ織ヲ足ス

仰聞ケ

吉島政介

暮方ヨリ森坂紀州卿ヨリ関口ヲ以テ書翰

五ツ半ニ相成ル

持参ス

昨今奥羽ヨリ重立ル歎立ニ付

海岸ヲ内ニ雑出兵歎願ヲ以テ

卿本意ニ

資金ヲ以テ

歎願書差出し又内濱子爵
又面会ニて御頼ミ申上候情歟ハ
君公始め真ニ諸藩ニ対し慚愧ニ堪ヘ
歎願書未タ出ス却テ天地ノ歎ヲ深シ
風ニ来沢ニ甚疾猶已ニ今春ハ来仙堂ニ情誼
愚案ニハ仙堂ノ駈使ヲ以今日ノ形勢ヲ米沢
ヲ墨ニ揆格延ニ及ヘハ
却テ御為ニ不宜ト申ス
黨ニ有志和島ニ遣ハシ諭ヲ
悔悟セス惜ヒ
連衡ノ役人来援
ヲ誤リ
徒ラニ
故ニ仙台ニ追ヒ
ハ汚シ罪
歎ニ一身ニ罪ヲ引
悟リ定ノ
足ラス

初説消ヘ
ヨリ
一奥羽
ヤヲ
薬ヲ
時節朝廷
ト
歎
一昨夜
悪ノ
ヲ
沼津田中両所ニ
人良来ノ旬論不自由ヲ

説ヲ信ヒ
時ニ
ニ
ヲ
急速ニ
ヲ
皆ニ
朝廷
ヲ
ヲ
ヲ

扶助米を與ふるの配り當今應募の地米の配當と
ふ成駿州二十四萬石丈け
一駿州表暗殺の件用ゐ之ものゝ嫌疑ある暗殺と憂ふるに
ゟ人心疑惑なく際朝廷民部公の委任し旨
書を依れる命と聽ものゝ諭告我好老兵改革
性復十五ヶ條觸書岩倉殿修正を十日ゟ布
ゟ雅等の命
一ゟ英ノサトウ等ゟ内々にて横濱新聞ん勝安房
ゟ朝廷ゟ竹相談活板ゟ事由なて國家ゟ
賣物有之候ゟ而ゟ戰害ゟ逢ゟ歎
ゟ新聞ゟ然ゟざゟ處ゟ永訣別ゟ為ゟ
ゟ為め等ゟ也勝答曰大政返上ゟ老寡居ゟ趣意ゟ
ゟ七ヶ萬石ゟ朝臣ゟ内ゟ何藩ゟ責國ゟ也
ゟ小倉ゟ笠紙ゟ者ゟ暇今ゟ晩ゟ酒沢ゟ
幾今迫ゟ等ゟ幣ゟれてゟ
サトウ等れい西洋いゟ
一ゟ春憲幕府ゟ戰ゟ
ゟ成ゟ幕府會計ゟれ
一ゟ度ゟ
穩ゟ憂ゟ必ず何變
ゟ等ゟ話ゟ

然源不致拒

同北六日晴

早起毛利家ゟ
實ゟ而日ゟ國事ゟ憂慮ゟ
難事ゟ
金談ゟ年大改革ゟ
議ゟ起ゟ國家奮興ゟ
ゟ國論一定ゟ中納言ゟ
舟波早朝ゟ一昨日到着ゟ

千五百石　從二萬石　家老
四百石　至一萬石　中老
二百石　馬廻
百石　歩行組

三人扶持二十四石　改武良字右　士分以下

三人扶持四石　足軽

一遍格式世禄ノ分配ヲ四十以上ヲ国城ヲ守リ四十以下ヲ海陸ヲ守リ當分諸役人ヲ持知、外家老始メ相當ノ役金相與ヘ云々、格ヲ以テ家老ヲ筆頭ニ高ヲ内取ヲ萬石ヲ収納ニテ百ヲ以テ騎馬士百五十人ヲ有之ヲ以テ盡リ家来ヘ直士ニ未ダ一地所ヘ官家ヲ以テ一統藏出リ以供給ス歳由餘計六萬石ヲ高ヲ海陸ノ軍費ヲ供ス各政務權ヲ以テ依リ按摧門地ノ不論

一ヲ以テ淺薄ヲ今日午前ヨリ夫ノ政相摸君爺ヲ以テ議致度旨ヲ一

勝安房ヲ昨次手段ヲ以テ一先ヅ帰国ヲ今日朝ヨリ七ツ同伴ヲ白ヲ不苦旨ヲ以テ一千ヲ手板勸メ

ヲ以テ毛利ノ国事ヲ用ヒ人才ヲ奇遇ヲ如得

ヲ以テ為ヲ為ヲ以テ一先ヅ帰国ヲ今日朝

一外国ニ有ル着眼高ニシテ各ヲ於テ公館驗ヲ以テ日ヲ於テ国中

一全権ヲ有ル為ヲ以テ助力等ヲ陶冶ヲ以テ話ヲ書シ

一我シ以テ為ヲ我ヲ以テ二元等ヲ小生ヲ以テ所ヲ信ヲ

却テ不決ヲ以テ但シ堰ヲ以テ一件ヲ以テ日本人ヲ以テ英佛ハ苦ヲ

一王朝ヲ政柄ヲ原ヨリ以テ朝ヲ

豊ヲ以テ為ヲ菩提ヲ以テ為ヲ白ヲ外国ヲ償金ヲ以テ年

需ヲ水槽兵難等ヲ相殺十ヲ半ヲ以テ為ヲ但幕府ヲ着及

計ヲ治計ヲ以テ為ヲ償ヲ有ヲ如何ヲ仰ヲ以テ為ヲ

度王政ヲ以テ成リ以テ為ヲ変ヲ携幣ヲ以テ為ヲ無理ヲ非ヲ

朝ヲ徳川ヲ以テ為ヲ三年ヲ過ヲ以テ為ヲ於テ慕府自敬ヲ以テ為ヲ

王朝ヲ以テ為ヲ等相像ヲ以テ為ヲ

一箱館事件ヲ諸藩共ヲ勝カ内通致シ居リ首唱ヲ

尚勝ノ話、實ニ笑フヘシ、右者今度奥州ヨリ
歸ル脫走徒ト殺ス、藤村ニテ不致衣服ヲ與ヘ駿河迄
シ又箱館ヘ脫走前モ三度迄歎願モ差出タル迚ニ
依用無之故脫走スレハ必嫌疑難免仰付候後
ニテ外國ノ證書ヨリ云
一五月頃幕府ニテ金ヲ配當ニ付ハ二百萬ハ出サレタリ
然ニ此頃十萬兩蓄財ノ家ハ江戸ニ三軒有之已ニ金ヲ
虛喜ハ云之故騷動ニテ埋メリ
一駿州ヨリ出茶ハ國半四十萬兩有之右ハ税金ヲ
掛ケ十萬金モ官府ヘ利スル筈ヲ彼人共申ハ兵吉ト
取扱ヘ置タリ如何ニハ其茶ニ官ヨリ手ヲ下セハ
必ス農民茶氣ヲ起リ可申民共ニ届メハ国本モ
ニテ決ニテ民ヨリ無理ニ稅ヲ收ムヘカラズ
駿州ハ海道筋ニテ来ル往来一通
ニ候ハ甚不自由ニテ然シ徳川ノ夢醒ハ往来一通
ニテ相見ヘルナリ又 朝廷ヨリモ通疑ニ有之ニテ
家臣茶頭ハ不茶頭カ又集一向ニテ相分リ

已ニ 慈衆ニハ通行ニモ昌平然リ
遠州地形領ヲ成上ヲ濱松岡崎相繼
ク城ヨリ必ス復舊ノ情ノ起ヲ城者ヲ破却シ陣屋トシテ
已ニ沼津田中両城共ニ城構門墻除却
致度旨願居リ候ニテ之ヲ
毛利説
當春 堺表ニテ夷人ヲ打ニヨリ人物モ大ニ進ミ
棟夷打唱ル者ハ無之大成ル
幕ハ八十萬両ニ而國産米ノ銅山ハ阿州境ヘ
鑿リタリ是ハ成就セハ莫大ノ費用ニテ九止ム
然ニ材木ヲ伐リ阿州地ノ谷野川ヘ流シ
海上運送致度処多年阿州ト右作
ニテ不和ヨリ双時ニ當ニテ國利ヲ公ニ量リ
度旨ヲ阿州公在職中ヨリ願出ラレ
勝
米沢ノ義モ今日カ明日モ朝廷ヘ嫌疑モ

旨ニ付テハ尊藩ヨリモ御尽力相成度旦
昨夜ノ歎願ニ依テ大ニ同意ノ処ヘ
今ニシテ真ニ出実行ヲ遂ル処ヘ
云ヘ毛利ニお向遠説
一 坂田潔今日越後ヘお立ニ相成候
第壱番ニお呉ヘ申度事ニ候
一 夜飛脚出発ニお成候ニ付
此方ヨリ甲斐守様ヘ御届
建白書来ル国議益盛ニ
一 夜七ツ頃鉄中廉子風疾ニ
ヘ罷越候
同廿七日晴
新徴老三階ヘ老奥羽ヘ
書状ニ等ノ泥谷敦水ノ以下在京者ヘ
宮家ヘお届ニ
駿河守様ヘ



岩倉ヨリ招ニ付ノ事ニ
等ノ事ニ
越岩村虎旗モ一和ニお
今ニ至テ
同廿八日晴
駿河守様ヘ天機ニ
午後ヨリ
横ニ
岩村虎旗来ル自罪ノ
ニ付テ機会ニ
天義ニ
ニ
意ニ
酒ニ
中老水野ヘ
夜中川ヘ

廿九日晴陰午後微雨

八字ヨリ列ヘ乗リ毛利茶助ノ面會ヲ乞シ
依頼ヨリ毛利家氣付廉
ヲ以テ面會毛利家ニ於テ
ヨリ御通知ヲ受ケ午後
早速中納言樣ニ面會毛利家ニ於テ
ヨリ御通知ヲ受ケ午後
ヨリ御通知ヲ受ケ午後
早速中納言樣ニ面會毛利家ニ於テ

精神到處何事不成
申包胥
七日七夜哭秦廷



為人感動ん至誠をもつて左右し
朝廷機會ノ前後ニ一切不關哀ヲ已ム人ノ
罪ニテ諸藩實典ヲ勉ム者多ク京師ノ大義ヲ
以テ重役ヲ事局ニ當ル者多ク京師ノ
カヲ假ラ謹慎中ニ出ル者多シ
藩政治ノ次ニ上京ヲ命ス
獄中ニ在ル者モ隨テ
皆京師ニ參會ス
書ヲ以テ
如何ナル役柄ヲモ
事ヲ問ハルヽノ
又私ニ京師ノ
ヲ人靜事局ニ
三ノ字ヲ短文ヲ
朝廷ノ
内聞ニ
諸侯ノ

況ンヤ繼中ヲ
朝議ニ
唯一封ノ
ヲ以テ
朝議聞ニ不聞ト
ヲ
ヲ



為シ且ツ
默止ル
家前人ノ
出ヲ
京師ニ
不敬ノ
小倉藩
久江宗記ヲ
薩摩ヲ
藩ノ
ヲ
諸藩公卿諸侯
ヨリ
諸藩公議人ノ
ヲ
ヲ
慶應
一九條殿
夜半
十二月朔日晴
朝飯後
行人一同
十二月七日頃ヨリ
朝議ニ
薩摩藩
議事院ヲ
議ニ
直披ヲ
醍醐殿
攝政
東京
病氣ニ
ヲ
ヲ
ヲ

来ル八日還幸ニ付御市

[illegible]院平石何某家所[illegible]
[illegible]
[illegible]

同四日晴

朝下村権参事宅ニ至ル年賀ノ画会ヲ催ス事ニ付キ天行居主人ヲ訪ヒ其事ヲ談ス依テ天行居ニ至リ画会ノ事ヲ談ス依テ中食ヲ饗セラル午後帰宅ス

下村老利勇人ト行キ年賀ノ礼ヲ述ル

一老利勇ヲ訪ヒ画会ノ事ヲ談ス

一老利勇ヨリ書状ヲ以テ画会ノ事ヲ報ス依テ直ニ返書ヲ認メ使ヲ以テ送ル

駿河守於江戸表天機ヲ伺ひ候ニ付
越後二而松方面海陸ヲ以
書翰ヲ京内寄ヲ以
候ニ付
其節艦名斯ニ
陸軍ニ而
朝比奈一件
勝山様
御用
駿河守被仰付
奥羽越諸藩
一上行人不残
仕掛ヲ
一昨夕京ニ而
先生ヲ
一書状ヲ
不在ヲ
ヲ
伊勢
野路
御用

同七日曇

本陣ニ而
遠ヲ
駿河守被仰付候ニ付
奥羽越諸藩
天誅ヲ
事
一上行人不残
仕掛ヲ
一昨夕京ニ而
先生ヲ
一書状ヲ
不在ヲ
ヲ
伊勢
野路
御用

二十九日 修理太夫上杉憲顕 越後守護長尾景忠 各参向 長尾景忠 参会 駿河守護 吉良貞家 参向 天武 御代 始 上杉憲顕

将軍 容保 征討 上杉憲顕

勅命 容保 卒 上杉憲顕 舟 重ニ

慶邦 兵ニ 奥羽諸賊 和睦 之 魁首ト

為り 大兵 之 容保 屠 上杉憲顕

王師ニ 抗衡 天下之騒乱 之 醸成 免

遂ル 能ハ 条理 度ヲ 一ニ 海嶠 厳刑

以テ 海内 平定 先ヲ 朝廷 自ラ 督率軍

門ヲ 出テ 謝罪 哀訴 及ニ 命ヲ 奉シ 勅旨

勦絶ニ 為ノ 出兵 書ヲ 実知リ 表シ 以テ 其

情實 聞ク 出格 至仁ニ 思ヲ 次第

伐ヲ 隠忘 仰ク 願ハ 内地ニ 高名

名ニ 橋本 戒慎ト 家督 相続

仰ク 事

但 救逆 首謀ニ 家来 早ク 取調ヲ

出事

十二月

別紙ニ 通ル 仰ク

事

十二月

行政官

上杉駿河守

其方 儀 今度

仰出 之 趣 承知 奉 謝恩 之 為 上杉駿河守

御使 差向 候 間 此 段 申聞 候 事

行政官

上杉駿河守

此 度 廃藩 置県 之 儀 御聞 及 之 事 と 存 候 得 共 猶 又 別紙 之 通 被 仰出 候 間 此 段 申聞 候 事

十二月

先日令ぼく被下候ニ付御礼
梶原平馬　菅野覚兵衛　内藤豊次
武井東馬　秋月悌次郎
山川大蔵　今泉雄作　井深梶之助
九山主水　湯川為吉　佐田左馬
馬場源四郎
名前ハ名入和歌ニ而ハ無之
名葉を會藩巨魁之名を日毎ニ歌折
之如く厨下ニ
同八日晴
奥羽天裁之儀ニ付建策之儀ニ付他行ニ而
一朝七字頃遠雷
市中聲ニ而告知ル
供奉ニ而官武五名
省略ス

腰

岩倉殿ニ而候ニ付四ツ半ニ退出
三條公東京ニ而滞京ニ付大久保一蔵
ニ而ハ無之ニ付水戸

旌部
青木斉宮 阿州 大橋建 中村晋平

来春於幸之四本丸ヶ宮殿ヶ新造ヶ為ノ
ヶ神田川通ヶ接ヶ右ノ南ノ新橋川筋ヶ
御用ヶ木ヶ唱ヶ

勝安房 去月廿ヶ日ヶ御用ヶ召ヶ出ヶ常ヶ
何ヶ方ヶ迄ヶ為ノ御用ヶ罷ヶ出ヶ候ヶ哉ヶ
面会ヶ之ヶ事ヶ

徳川家臣 扶持米ヶ

四人持扶 三千石以上ヶ旗下
三人扶持 二千石以上
二人扶持 千石以上
一人扶持 千石以下

扶人数一万三千人余ヶ
農商ヶ勝手ヶ
官職ヶ附ヶ
八百両ヶ二十人扶持
七百両ヶ五人扶持

家老
中老



五百両ヶ十人扶持

扈従ノ密勿ヶ之ヶ人ヶ手ヶ
小臣愚考ヶ之ヶ本邦ヶ大変遷鍾会ヶ
主室ヶ衰弊ヶ慈勤ヶ家ヶ
ヶ幕府ノ開ヶ
其卓識ヶ
ヶ家ヶ興起ヶ先ヶ
ヶ其志ヶ
ヶ後大乱ヶ
ヶ我ヶ君祖更ヶ天下ノ乱争ヶ鎮圧シ
ヶ主家ヶ尊奉ヶ
先ヶ
スヘキヲ非ヶ
別途ヶ
ヶ体認シ
ヶ氏ノ七滅ル
ヶ今海外文明ノ邦ヶ
大勢ヶ
目スル不統ヶ

事以下あと皆倣

武門ヶ古轍ヶ
ヶ時勢ヶ
ヶ家ヶ興廃ヶ関ル如キ

事ナラン式耶ハ是非浮説ノ争フ者ハ喜
印度ノ奮轍アリ近ノ支那ノ弊衰アリ同
屬ニ是非ノ争フ者ハ皇国今日ノ大警ヲ
不知ナリ又頃日ノ陋習ヲ不通ナリ目前ノ
邦家ニ痴ナリ我輩ノ此文ヲ取ラサル所以
解セス爰ニ是ニ於スレハ彼ニ疑アリ其始終
ノ洞観セス一端ノ窺フテ半信半疑各私ノ
穿ニテ偏見誤見解スル事勿キヲ能ス
亦何用捨行藏ニ関セス成知已ノ淳難キハ当
今日已ニアラス上下千年歴々タリ然リ然リ攻固毫
末モ疑アラン乎定論無論ニシテ実實ニ真知アラズ
者ハ書生ノ空論ニシテ其実ニ陳腐ニ説ノ如キハ
事跡アウテ論アレハ我輩ノ如キモ
世人是ノ笑フテ採ラズ然レトモ其評アルノ如キ
萬象ノ猜忌疑念ヲ容レテ攻大是ノ取捨
セン乎其事不埒ナル者時ヲ熟セサルヨリ
諸君君能ノ爰ニ見アラハ皇國興起ノ基

初テ進歩ノ見ニ於如何 福翁子

昨ヲ終リ前島来訪ノ事アリ
酒飯ヲ饗ス
北山先生僕ヲ訪ハル
大田黒ヲ訪フ不在
夕刻福集
夜ニ入リ帰宅

廿九日 晴

養適備来ル奥羽動静ノ実況
一校正済ム筆ヲ走ラス

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中村二十
加ゑ介物
すり改観
一郎

公議会ヲ設ケ雲州兩藩論ニ基キ長州
井原山内ノ諸侯一統列侯会議ヲ興立シ万
古不易ノ大定ヲ立ン事ヲ建言シ終ニ
中村与一夫衛来往ヲ数次ニ及ヘリ
ト云ヘリ

下村陸奥守ヨリ兩藩ヘ内々御解ヲ以テ
兵端ヲ開キ中ニ挿入シ兩藩ノ力ヲ
疲弊セシメ其ノ隙ヲ窺ヒ大機会ヲ得テ
多人数天下ヲ切リ取ル事ヲ目的ニ
シ兵隊ヲ組織シ東北上國ノ形勢ヲ
要衝ヲ経略シ兩藩ヲ説諭シ
誓ヲ以テ兵端ヲ開カシメ
一挙ニ大兵ヲ進メ
一挙ニ兩藩ヲ滅シ
一挙ニ天下ヲ切リ取ル
ト云ヘリ

一土藩板垣氏ヨリ京都ヘ報知ニ
一佐山先生ヨリ世良太一ヘ通知
ニ吉田謹助ヨリ新銭ヲ
義塾ヘ記事ヲ入ル

一先生市ヘ帰ル

## 四月十日晴

今日来研校内ノ事様被為
屋形様密雲寮ヘ
一岩村宅ヘ来
一昨夕ヨリ腹痛
奥村ヨリ
一昨朝ヨリ
御前ヘ
且兩屋形ヘ
ト云ヘリ

十六日晴

日誌一冊 自十月晦日 至十月晦日 清書ヲ添 會談所ノ著ス

手紙一通 佐渡ヨリ差越 事件演說

昨夜岩村ヨリ厚意提學 從今死人ヲ爲首謀 參政而同意ヲ拔手ヲ背 從

爲帶ヲ著ケ差シ重役ヲ誰ヲ死ヲ 如何ヲ事ヲ一旦首謀ヲ者ヲ著ケ

逆叛人ヲ者ヲ首者ヲ(是)不服ヲ旦忠臣ノ跡ヘ

首謀ノ筈ヲ爲 如何事ヲ第一

家名ヲ對 情實ヲ

歎息ヲ 佐渡ヨリ書面 當惑

佐渡ヨリ荷物ヲ次ノ

白鞘刀 一腰

眞綿 三十把

鮮鯛 二千疋



三條ノ事ヲ淳矣、力ヲ

城ヲ其ノ死者又ヲ

淳ヲ士ヲ人ヲ一層罪ヲ

主ヲ今罪ヲ有ヲ

ヲ如ヲ一日一

ヲ朝ヲ正ヲ罪ヲ

ヲ事意ヲ爲ヲ

如何ヲ自ヲ

爲ヲ

山形ヲ木野ヲ

ヲ帝ヲ事ヲ

諸役人ヲ

奥州ヲ(庭)庭ヲ

ヲ七ヲ

岩城岩代陸前

羽前羽後

一於津雲院鵜洒蓼麥於

新保中老朝

人を中流と称し以下貧民其事と
分ち右を書初ゝ方と二つに
ゐ私の事

一長岡藩三間織部未決
年前漢文書面を以て
中村活風と称す河右縄と助
宮に於在命し若松初拷
一人ゐ真を於て
学者忠吉内活於と
彼活風ゐ名卯慶ゐ
ゐ寺ゐ件と
ゐ藤伐秋月校し方ゐ
ゐ私ゐ

志八時地震 眠ゐ名

一長兵ゐ昭校ゐ
一ゐ移伐ゐ

山東洪洪ゐ
ゐ
ゐ